JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

目次

77回、78回、79回スウェーデン研究連続講座

77回
ノーベル賞に値する研究とは ― カロリンスカ医科大学の学者たちの創造力　山本祐二

78回
スウェーデンの野外環境教育と子どもの生きる力　アンダース スツェバンスキ ― ニーナ ネルソン

79回
スウェーデン人の心のふるさと ― 現代に生きる古謡と民謡　リーフ・アルプシュー

スウェーデン研究特別講座

親を亡くした子どもたち ― 心のケアとその後のあゆみ　スサン・シュークヴィスト

随筆

スウェーデンへの想い　大石 和彦

リポート

イェーテボリ国際映画祭から ― ポスト・ベルイマンの北欧映画風景　渡辺 芳子

インタビュー

ヴィルヘルム・ムーベリ「Din stund på jorden ― この世のときを」訳出まで　山下 泰文

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所　所報
No.345 2008年12月31日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階
連絡事務所
〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail：sweden@tkm.att.ne.jp
URL：http://www.sweden-jiss.com/index.html

発行人・編集責任者：林壮行
Publisher&Editor in Chief : Takeyuki Hayashi
編集者：久保田健司
Editor : Kubota Takesh

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

第77回　ノーベル賞に値する研究とは　―　カロリンスカ医科大学の学者たちの創造力

前カロリンスカ医科大学助教授
山本祐二

前書き

私はスウェーデンのカロリンスカ研究所で勉強し、1987年に学位を取得し数年前に帰国した。研究所には5人のノーベル受賞者がいた。人口900万人の小国スウェーデンが、なぜそれだけの受賞者を輩出するのか。カロリンスカ研究所の背景と、どうしたら日本人がノーベル賞をとれるか。その環境つくりを、スウェーデンと日本の社会を対比しつつ、スウェーデンのノーベル受賞者の研究と生活を探ることで、考えてみたい。

「カロリンスカ研究所とは」

スウェーデンが多くの受賞者を出しているのは、平等な教授と学生、親子、男女の保証された社会だという点にある。

カロリンスカ研究所は大学、研究機関、病院の総合体で2000人のスタッフが色々なフィールドにいる。歯学、看護学部も併設し小さなプロジェクトごとに動き、大学としては大きなプロジェクトで進む。また、ストックホルム県の大きな総合病院と関係がある。カロリンスカ研究所で得た成果はカロリンスカ病院に報告され、臨床にも応用される。大学病院と連携した医学部である。

「ノーベル賞は天才が取るのではない」

ここにはフィンランドから来たラグナル・グラニークとか痛み物質の研究をするウルフ・ボンゴイラーとか、すごい研究者がいるが、わたしはノーベル賞をとるのは天才ではないという認識を持つようになった。医科学分野は知の蓄積とインスピレーションの二つが大事。天才だから知識を蓄積できるのではなく、凡人が努力の末に評価されるのだ。たとえば、先に紹介したグラニーク博士とは、私は毎日会って、昼食をともにしていたが、最初はノーベル受賞者だとは知らなかった。ごく普通の老人で、フィンランドから来て満足なスウェーデン語を話しませんでした。私の指導教官だったクリート・ボンボイラーも腰が低い紳士で、この人もノーベル賞に近い学者でした。

彼らは大体8時から5時まで仕事をします。クリートは夜中、午前二時までやっていて、私は彼を自動車で送ったものでしたが、例外的な学者でした。みんな長い休暇を取り、上下関係なく「あなた」と「わたし」で呼び合う関係です。学者の中には15年間、大学院にいて音楽、演劇、映画を勉強して、半年で学位論文をまとめた人もいる。

スウェーデンには、ひとつのことにとらわれない発想と姿勢がある。人生を謳歌しているのです。そういう人たちが、たまたま努力が実って、人より天才があったということ。努力を伸ばすのが一番大切だと思ったわけです。といっても、日本のように他人を気にして研究室の電気をつけ放しにして帰る、ということはスウェーデンではまったくありません。

「カロリンスカと日本の将来を考える」

カロリンスカ研究所の将来について話します。数年前、スウェーデンは国家の方向性として、バイオとITに将来を託すと決めました。バイオ関連ではカロリンスカがメインになって共同研究が進められる。しかし、日本では学会を超えた共同研究をしない。カロリンスカでは学科と学部をまとめた大きな領域で、大きなプロジェクトを組む。昨年はストックホルム王立工科大学とカロリンスカが（両校が中心になって）3つの大学が共同でイメージングを行うストック・ブレインを建て、ここは世界最高技術を持っている。

EUは国を超えて大きな共同研究に取り組んでいる。そのような、学部、大学、国を超えた共同研究が進められている中で、日本の医学研究部はどうするのか。カロリンスカは、米国とも連係プレーをしている。マサチューセッツ工科大やスタンフォード大など、有力大学と関係を持ち共同研究をしている。したたかに、現実性を帯びながら、将来を見据えた研究を行っている。そういう時に、日本はどうするのか。このままでは大きな差が出てくるだろう。

「語学の能力とフレキシビリティ」

カロリンスカの大学院はすべて英語でやる。英語によるハンディはスウェーデンにはない。むろん、自分の専門が外国にある、たとえばイタリアにあれば、学院生も学生も3年間の留学を認めるフレキシビリティがある。

しかしながら、カロリンスカで学位をとるのは大変である。論文は一般討論に回される。一般討論は専門分野の第一人者のスウェーデン人、または外国から招聘した学者の間で行われる。私の場合も研究論文を公開し、カロリンスカ内部の5名の教授が加わって、質疑応答を3時間やりました。わたしは全員の前で立ちっぱなしで、自分の研究には意味がないと指摘されながら、応答する苦しみといったらなかった。落とすための審査で、容赦なくやられました。

しかし、このようなときに招聘されるのは、ノーベル賞にも影響があると思う。受賞者の多くはカロリンスカに招待され、講演を何回かやっている。逆に言うと、招待されない学者は受賞できないということになる。

「社会システムと背景を探る」

さっきも話したように、スウェーデン人は夏休みを取る。カロリンスカも7月は誰も働いていない。有給休暇が4, 5週間あって、別荘などに行っている。土日も働かない。それでいて、なぜノーベル賞受賞者が出るのか。社会システムの違いが大きいからだ。

たとえばスウェーデンには（専業）主婦はいない。女性もプロフェッショナルは離さず働き続ける。働き続けられるような環境、保健所が整備され産休で保護されるからだ。日本のたとえば世田谷区では、保育所に子どもを預けられるのは、住民の33パーセントだという。これでは3人に2人は子どもから手が離せず、社会進出なんてできない。日本の行政は間違っている。

また大学では、教授会ですべて決まるということはない。会議には教授、学生、学院生、テクニシャンたちが出席して、この学部をどうするか全員参加でディスカッションする。

年金も保証され、健康保険もある。スウェーデンでは入院は無料で、薬代は年間で6万円を超えたら無料になる。このような保証された社会と日本では、どちらが研究しやすく女性の社会進出が図れるか、いうまでもない。アメリカには公的な社会保険や健康保険がない。ハーバードやエールなどは裕福な白人学生が多く、最初から人種や貧富のハンディがある社会だ。また中国やロシアは一人もノーベル医科学部門の受賞者がいない。思想統一、思想を強制する国では受賞は困難だ。スウェーデンにも王様がいて貴族制度は残り、貴族以外は入れない場所もあるが、それはホントのごく一部で、平民と平等だ。

「日本の目指すべき道」

スウェーデンは格差なき社会を目指す、保証された社会で、国民が研究を続けられる社会というバックグラウンドがある。ひとりのノーベル受賞者を出すには、99パーセント受賞できる実力のあるサイエンティストが、数多く必要である。有能な科学者が底辺にいて、プロジェクトを選択し集中して遂行する。そのような底辺を日本がどのくらいもつことができるかに、どんな日本を選択するのかということに、ノーベル受賞の合否がかかっていると思う。だれのための国家を目指すのかが日本に問われている。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

第78回　スウェーデンの野外環境教育と子どもの生きる力

アンダース　スツェバンスキー：スウェーデン　リンショッピン大学
国立アウトドア環境教育センター所長
ニーナ　ネルソン：リンショッピン大学病院　小児科医

成長期の子供は、屋内環境と屋外環境のバランスのとれた組み合わせのなかで成長発達をしなければならない。幼時に受けたストレスは、成人になっても影響が残るので、少子化のいま、育児は親にとって生涯の仕事になっている。

「1日650メートル歩けば救われる肥満」

ストレスは適度な強さであれば、注意力と記憶力がむしろ推進されるが、過大な強さになると記憶障害・海馬の萎縮・神経細胞の減少などの障害を起こし、心臓病・高血圧・糖尿病・肥満・免疫障害・胃腸病・睡眠障害・知的感情的行動的問題などが発症する。子供の肥満が増えているが、3年間で標準体重よりも8kg多くなった場合を例にとると、一日あたり7. 3gの増加で、これは毎日わずか650m歩いていれば消費できたはずの量である。
肥満の人口の割合を国別に見ると、北米の中高年層が一番多く、日本では男女とも低くなっている。昔は栄養不良と伝染病に苦しんでいたが、最近は肥満と精神身体的な問題が出て来ている。

「子どものストレスの実態と対策」

スウェーデンの全国調査によると、学校内でストレスを感じている子供の割合は近年急増していて、特に女子の場合は1997年に33%であったが、2003年には半数近くの47%がストレスを感じていると答えている。
孤児の保育の例によると、厳しいしつけで愛情に欠ける態度で育てられた子供は発育（体重の増加）が悪いが、愛情を持った優しい扱いをする保育者に代わると、急に発育がよくなり標準体重を取り戻す。幼児のストレスの緩和には肌のふれあい・おしゃぶり・甘いもの・NIDCAP（新生児個別ケアプログラム）・愛着強化プログラムなどが有効である。肌のふれあいの結果、ストレスの強さを表す唾液コルチゾルが減少し、ムードスケールが上昇したという報告がある。支持療法は個別に行い、予防的で管理が行き届いていることが必要である。コルチゾルの量を調査した結果、社会的に下位の家庭ほど、また土着の北欧人よりも移民の方が、さらに失業などの問題を抱えている家庭ほど量が多かった。

「野外活動の必要性と効用」

野外学習をしている学校としていない学校を比較すると、している学校のほうが感情的な安らぎの程度が高い。野外活動をすると、人との信頼関係も生まれる。ストレスを緩和する方法には、音楽・タクティール・良い友人・良い本・運動などの他に健康生成と首尾一貫感覚（SOC）の考え方も必要である。
SOCは理解可能性・処理可能性および有意義さが柱になっている。また、健康生成のためにはイルカと泳ぐなど、ペットとのふれあいも腫瘍・心臓病・鎮痛・慢性小児病・問題行動の緩和などに有効である。

「バランスのとれた頭と体の相互作用を促進する野外活動」

人類の進化の歴史を見ると、古代は主に手を使って作業をしていたが、次第に頭を主体にするようになった。しかし、健全で持続可能な生活を送るためには、手と頭の両方をバランスよく使うべきである。
野外教育の定義は「野外活動」「環境教育」「個人・社会の発展のための教育」という三つのテーマが中心になっていて、その外側に人の健康と幸福があり、さらにその外側に健全な環境（持続可能な生活）があるというモデルで表すことができる。
野外教育は、実際の現場で自分の目で見て体験することと、頭で考える事との相互作用を通じて学習しようとするアプローチである。従って、社会生活や自然や人工の環境が学習の場になり、実体験による学習と教科書による学習

の相互作用に重点を置き、学習の場所を重視する。すなわち審美的・感情的・生物学的・文化的な感性を総合して学習し、その結果を色々な形で表現する。

「情報の洪水を制御して環境との調和を図る」

情報は何トンもあるが、そのうち知識になるのは何キログラムかで、知恵になるのは何百グラムかに過ぎず、さらに本当に人のレベル高揚に役立つのは数グラムしかない。

学習するには全身が必要である。目で見たり耳で聞いたりするだけでなく、手で実際に触って見る、頭で考えるだけでなく、荷を背負って足を使って移動し現場で実体験をして全身を使って学習をする。

こうして他人や環境との調和がとれた自分を自覚し、尊重し、愛するようになることが必要である。

国連環境開発会議のアジェンダ21によれば、教育は物理学、生物学、社会経済環境および人間の発達を動的に扱い、公式・非公式な場を活用して行わなければならない。人類は自然から切り離すことはできないのである。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

第79回　スウェーデン人の心のふるさと ― 現代に生きる古謡と民謡

スウェーデン国家認定伝統音楽継承者
レイフ・アルプショー

はじめに

私の名はレイフ・アルプショー。スウェーデンの国家認定伝統音楽継承者の資格をもつ民族音楽の演奏家である。本日はスウェーデンで現在演奏されている古謡・民謡ダンス音楽の実演を皆様にご覧にいれながら、スウェーデン独特の古い民謡楽器、特にニッケルハルパを中心に紹介したいと思う。

スウェーデンの民族音楽演奏で使われる楽器

スウェーデンの民族音楽の演奏で伝統的に使われる主な楽器を三つ挙げると、バイオリン、カウホーン、ニッケルハルパである。バイオリンはスウェーデンの民族音楽では中心的な存在で、欠かすことができない楽器であるが、楽器そのものは民族楽器というより世界で広く使われ、その形状も、構造も、弾き方も、音色も一般によく識られているので、本日は説明を省き、その替わり実際の演奏を三曲お聴かせするにとどめよう。（バイオリンによるダンス音楽の演奏）

次にカウホーンの紹介をする。カウホーンは牛の角をくり抜き、音程を変えるための指穴が空けてある角笛で、吹くとホルンのような素朴で暖かい音がする。近くで聞くとそれほど大きな音のする楽器ではないが、音は遠方まで良く通る。カウホーンは、もともとは広大な林野に放牧する牛や羊を見張る少年たちが、安全のためにもっていたものである。少年達が一人でいて、牛や羊を見失ったり、怪我をしたり、狼や熊に襲われたりしたとき、助けを呼ぶためにカウホーンを吹いた。カウホーンの音は2～3kmは届くが、冬は10kmも届くことがある。カウホーンは指穴をふさぐことで音程が変えられるので、ダンス音楽等のメロディー楽器としても用いられた。（カウホーンによるダンス音楽の演奏）

スウェーデンの国家楽器ニッケルハルパ

それでは本日のテーマである、スウェーデンで最も特徴のある伝統的な民族音楽ニッケルハルパのお話をしよう。

ニッケルハルパという楽器は、一言でいえば「鍵盤のついたバイオリン」である。ニッケルハルパは、ピンと張った弦を弓でこすって音を出すという意味ではバイオリンと同じである。弦は16本あるが、その中で実際に弓にあたるのは4本で、他の12弦は共鳴弦として働く。バイオリンでは、4本の弦を4本の指で押さえて音程を変えるが、ニッケルハルパでは鍵盤のキーを押すと、キーに連結した駒が16本の弦を押さえて音程を変えるようになっている。

ニッケルハルパは、14世紀頃スウェーデンに現れ、他の国には存在しないスウェーデン独特の楽器である。しかもストックホルム北部のウップランド地方にしか伝わってこなかった珍しい楽器である。ここでニッケルハルパの有名な曲「アイスブレーカワルツ」（曲名の由来は不明）を弾いてみる。（ニッケルハルパによる演奏）

ニッケルハルパはスウェーデン独特の楽器であるが、この楽器の原型はスペインにある。それは12世紀から15世紀にかけてスペインを中心にヨーロッパで流行ったハーディガーディという楽器である。この楽器では弦に接触する形で円盤がついており、この円盤についているハンドルを手で回すと、円盤と弦がこすれて音が出る。そして音程を変えるためのピアノのような鍵盤がついていて、鍵盤のキーを押すと、キーに連結した駒が弦を押さえるようになっている。形は箱型で据置式である。このハーディガーディがスペインの教会からスウェーデンの教会に入った。ウプスラにはハーディガーディの名手がいたという。そのうちスウェーデンでは、ハーディガーディの円盤を弓に置き換え、形をバイオリンのような構造にした楽器が現れた。これがニッケルハルパになった。ニッケルハルパは、農民や16世紀頃から現れる労働者層に人気があった。上流階級の人達はニッケルハルパよりバイオリンの方を好んだ。

ニッケルハルパはなぜウップランド地方という限られた地域において伝承されたのであろうか。それは、ウップランド地方で鉄鋼業が発達したことと関係がある。1550年頃ウプスラ近くに鉄工所が出来た。そしてそれ以後、ウプスラを中心に鉄工所がどんどん増え、鉄鋼産業が発展してゆくのであるが、もともと労働者層に人気のあったニッケルハルパは、鉄工所に働く人達に好まれ、もてはやされた。これがウップランド地方でニッケルハルパが伝承されてきた理由である。ニッケルハルパは季節労働者の移動にともなってスウェーデン中部から南部へも広がりを見せ、1880年—1900年には街中でも演奏されるようになった。しかし1900年代に入ると人気は落ちてしまう。

ニッケルハルパが再び人々に受け入れられるようになったのは、エリック・サールストロム（1912-1986）という天才が現れたからである。エリックは廃れかけていたニッケルハルパを改良して復活させ、多くの美しい曲を作った。彼は300台以上のニッケルハルパを作り、自ら演奏して各地を回りこの楽器の普及に努めた。1950年－1960年、スウェーデンがもっとも豊かな時代に入ると、人々の民族音楽への興味も高まり、エリックの改良したニッケルハルパは多くの人に弾かれるようになった。私も独学に近いかたちでスウェーデンの民族音楽を学び、ニッケルハルパの奏者として一本立ちした。1970年代に入るとニッケルハルパは若い人達に人気が高まり、一時はブームになった。それまではニッケルハルパを教えるところはなかったが、音楽学校で教えるようになり、私も教師となって、以後ニッケルハルパ奏者の育成につとめている。

ニッケルハルパはまだ量産できるシステムになっておらず、相変わらず手作りであるが、それでも演奏に使える楽器の数は3万台以上になった。ニッケルハルパは、今やスウェーデン各地のお祭りやパーティで弾かれるようになった。人々はその演奏を演奏者とともに楽しみ、曲に合わせてダンスをする。スウェーデンでは年に一度、民族音楽の愛好家が世界中から集まって、皆が参加して弾くという大きな催しがある。そのときは、広い野原に数千人の民族音楽の奏者がプロもアマも楽器をもって集まり、夜を徹して全員参加でニッケルハルパや民族音楽を弾き、踊って歌って楽しむ。

最後に、エリック・サールストロムが1945年に作曲した「演奏家のよろこび」という曲をお聴かせしてこの講演を終える。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

親を亡くした子どもたち ― 心のケアとその後のあゆみ

スサン・シュークヴィスト：ジャーナリスト、作家、翻訳家

このたび日本語版が出版された拙著「パパ、ママどうして死んでしまったの」（論創社刊）についてお話しします。（太字は手記を書いた子供の名前と現在の年齢）

次のようなことがよくある。
「君のパパは？」「パパは死んだ」「あ、ごめんなさい」ここで会話は途切れてしまう。本当は父を失った子は「別に君が悪いわけではないよ。もっと聞いてよ」と叫びたいくらいなのだ。
しかし、殆どの人は続けて話を聞こうとはしない。
この本は、親を亡くした31人の子供たちの手記をまとめたものである。亡くなった原因は病気、事故、災害、自殺、DVなどさまざまであるが、彼らは皆その悲しみがどのようなものであるかを深く知っている。どのように毎日を過ごし、ばらばらになった家族の絆を取り戻そうと努力しているかを語っている。
子ども時代に親を失うことは何よりも悲惨なことで、突然に子供ではいられなくなり、家族が崩壊してしまう。親類間で問題が起きるかも知れず、家庭は安住の場所ではなくなり、生活は苦しくなり、孤独感にさいなまれ体調も崩れてしまう。悲しみは想像以上にエネルギーと時間を必要とする。

ヨハンナ（13）「子供であることが必要なのに、子供でいられないということはつらいことだ」

マルクス（16）「自分の家を離れ、違った習慣を持つ新しい家族のところへ移るのは、すごく妙な気持ちだった。僕たちはそれぞれ自分の部屋をもらい、自分の物もあったのに、最初はまるで居候のように感じて、どうふるまったらいいのか分からなかった。まるで、その家族の中に僕が無理やり侵入したように感じたので、できるだけ目立たないように縮こまっていた。でも次第になじんできた。」

数年前のタイの津波災害によって550人のスウェーデン人が亡くなり、60人の子供たちが親を失って以来、スウェーデンでは悲しみの中の子供たちに対する理解や援助の気運がたかまった。援助プログラムの中で、同じ境遇にある子供たちがお互いに助け合うことが一番価値があった。

マルクス「最も僕を支えてくれているのは「児童の社会的権利を守る組織」だ。同じ状況にある人どうしと話し合えることはほっとすることだ。お互いに助け合えてすごく楽しい」
私は10歳で父を亡くしたとき、一年間悲しみにふけり日常生活を取り戻すには二年かかった。
しかし長い目で見れば、悲しみによる強い力がゆっくりと築き上げられて行く。

マーティン（19）「母が死んで僕は二年ほど人生を失った。子供っぽくしていられる場所はもう僕にはなかった。洗濯機の使い方などを考えなければならなかった。僕には十代の反抗期はなかった。そんなものは必要なかった。そこに残されたものにただただすがりついていた。もし母が生きていたら、僕はいま感じている年齢よりも幼かっただろうと思う。」

孤独に落ち込んでいるときに、同じような状況にある子供が他にも大勢いることが分かると、自分が一人ではないことが分かり痛みが和らぎ楽になる。
専門家による支援が終わったあとでも、私たち友人、学校の教師、隣人などのいわば素人は引き続き助けになれる。しかし、ときにかれらは無口で、会話ができず途方にくれることもある。どんなことを話したらいいだろうか、何か聞いてもいいだろうか、どう振舞ったらいいのだろうか。その答えは、この本の中で子供たちが書いている。この本が伝え

たいメッセージは簡単である。私を締め出さないで。こちらを見て何か言って、小さなことでもいいから何かして！背中をむけないで！遠慮や間違った気遣いや無関心による沈黙の壁は悲しんでいる人たちを一層孤独にし疎外感を与え、気持ちを傷付ける。

マーティン「学校のカウンセラーは「つまり、お母さんは死んでしまうということ？」と僕の目を見ていった。「そう・・・たぶんそうなると思う」と僕は答えた。カウンセラーのこの言葉を僕は今も憎んでいる。彼女は僕の希望を奪ってしまった。」

目をそらしたり、軽率な言葉や思いやりのないうそは記憶に刻み込まれてしまう。
静かに亡くなったお年寄りを、子供や孫が悼むという本は既に他にも沢山ある。しかし、大きな子供や十代の若者のための本は殆どない。原因が何であれ、子供たちにとって親を奪われるということは、常に突然の思いがけないことである。

カロリン(20)「近所の人たちは私を避けていて、そういう振る舞いには、わたしのほうが恥ずかしくなってしまった。このことは私の記憶に刻み込まれている。友人でさえ挨拶もしてくれなければ見てもくれなかったりした。私はまるで疫病にでもかかったかのように感じた。私は一人ぼっちで悲しみでいっぱいの子だった。でも気分が悪いことを人には見せないようにしていて、それを誰にも知られたくなかった。それは自分を守ることでもあり、他人に面倒をかけないことでもあった。しかし一方では誰かが電話をかけてくれて「どう？」と聞いて欲しかった。この本の一番年配の読者は、3歳のときに母親を亡くした百歳近い女性で、毎晩話を一つずつ読んでいて次のようにいっている。「不思議ね。この子供たちは悲しいことを書いているのに、私の心の平衡を取り戻してくれているのよ。この子供たちとは波長がとても合っているわ。」

トーヴェ(16)「人がどう思おうと、事態は起きてしまったのだ。それでも人生は続く」

今日は本に掲載されている手記をよせた31人のうち、ごく一部の子どもたちを紹介しました。この本が日本で刊行されるというニュースは、彼ら全員にも知らせましたが、みんなとても喜んでくれています。彼らのコメントの一部を紹介して本講演の締めくくりとしたいと思います。

－日本でこの本が出版されることはとてもわくわくする。
－この本を通して他の人たちの生き方や、将来の夢などについて知ることができ、お互いに理解もし合えて、ひとりぼっちでいなくてもいいのはとてもすばらしいことだと思う。
－この本がわたしに力を与えてくれたように、みなさんのお役にたつことを祈っています。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

スウェーデンへの想い

成田空港事務所
航空管制官
大石 和彦

「なぜスウェーデンに？」

皆さんが、スウェーデンという国に関心を持つようになったきっかけは、何だったでしょうか？
森と湖の美しい自然、機能的で瀟洒なデザインの家具や工業製品、あるいはスウェーデンへの赴任など、その理由はひと様々だと思いますが、私の場合、それは"飛行機"でした。
福岡の実家が空港のすぐそばだったことに加え、飛行機好きの父の影響もあり、ジャングル大帝や鉄腕アトムといった漫画に混じって、"航空ファン"という雑誌が小学生当時の私にとっての絵本でした。
その頃大のお気に入りだったのが、SAABが作っていたVIGGENという戦闘機です。
今でも強く印象に残っていることは、スウェーデンは森と湖の美しい国であり、強固な永世中立政策を守っていること。
そのために兵器類の国産化を進め、世界でもトップレベルの技術力を維持していること。
そして戦闘機は、有事には高速道路を滑走路として使用するという要求に応えるため、独特なスタイルをしているということです。
当時の私の夢はパイロット。
スウェーデンに生まれていたら、戦闘機乗りになっていたかもしれません。

「祖父と見たスウェーデン映画」

私の父方の祖父は、とても厳格な人でした。
物心がついた頃には病気がちになっていましたが、会う度にいつもピリピリしていたように思います。
そんな祖父と一度だけ、一緒に映画を観たことがあります。
原題を"Fimpen"というスウェーデンの映画で、日本では"サッカー小僧"というタイトルがついていました。
6歳の少年がスウェーデンの代表選手に選ばれ、ついにはワールドカップに出場するという奇想天外なお話です。
私は素直に楽しめたのですが、隣にいた祖父にとっては面白くないらしく、「これだからスウェーデン人は理解出来ない」などとブツブツ言っていました。
聞けば祖父は戦前中国でビジネスをやっていて、色々な国の人と取引があったそうですが、なぜかスウェーデンの人とは馬が合わず、また理解することも困難だったそうです。
それ以上のことは聞けませんでした。
この時以来、私にとってスウェーデンは"遠くて遠い国"になりました。

「初めてのスウェーデン旅行」

2002年4月、成田空港では2本目の滑走路が供用開始となり、一日当たりの取り扱い機数もその日を境に約1．5倍になりました。
オープン前の連日の訓練とその後の実運用の難しさもあり、一時期心も体も疲れ切っていたように思います。
どこかで体を休めたいなと考えていた時、ふと祖父のことが脳裏をかすめました。
本当に"遠い国"なのだろうかと自問した次の瞬間、スウェーデン行きを決意していました。
ちょっと遅めの短い夏休みをとって、ストックホルムのアーランダ空港に降り立ったのは8月下旬の深夜。
呆気ないほど簡単な入国審査の後、タクシーをひろってガムラ・スタンにあるホテルに向かいました。
途中、高速道路の直線部分に差し掛かる度に、『ここなら充分離着陸に使えるだろうな』などと考えながら空を見上げ、子供の頃のことを思い出していました。

スウェーデンでの滞在は僅か4日ほど。
その間、ドロットニングホルム宮殿、国立美術館、市庁舎、ヴァーサ号博物館などの観光地も訪ねましたが、ストックホルム市内を散策するだけでも充分心が癒されていくのがわかりました。
このような感覚は、今までに訪れたどんな国においても経験したことがありません。
それは、ちょっと控え目で誠実なスウェーデンの人とふれあうことが出来たからであり、また、歌を歌うような心地の良いスウェーデンの言葉を耳にしたからかもしれません。
離瑞の日、空から見た森と湖の美しさは譬えようもありませんでした。
この後、私にとってスウェーデンが"とても近い国"になったのは言うまでもありません。

「日本に帰ってから」
帰国後僅か半年間だけですが、スウェーデン語を習いました。
また、一昨年の4月からはスウェーデン社会研究所の会員となって、毎月非常に興味深い話を聞かせていただいています。
実験国家と言われるスウェーデンについて学ぶ魅力は、人間が人間らしく生きていくことの素晴らしさを再認識できるのみならず、社会福祉制度や環境問題対策など、日本の明日へのヒントがあるように思われることです。
これからも知的な刺激を受けるため、スウェーデン大使館に足を運び続けたいと思います。
そして近い将来、再びスウェーデンを訪れたいと願っています。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

イェーテボリ国際映画祭から
＝ポスト・ベルイマンの北欧映画風景

映画評論家　　渡辺　芳子

「世界67カ国からの489本を上映するスケールとスタッフ」

毎年1月末から2月上旬、スウェーデンのイエテボリで映画祭が開催されている。
今年で31回目を迎えた「イエテボリ国際映画祭」は、映画祭スタッフとイエテボリ市民が自負する北欧でNO1の市民映画祭だ。今年は世界67カ国から489本（スウェーデンは156本、デンマーク22本、ノルウェー14本、フィンランド12本、アイスランド3本）が、上映され、メキシコ特集（14本上映）を組んでいた。79年のスタート時は20本だったというから、上映作品数だけをとっていかに大きく発展したかがわかる。

英語字幕で何の不自由もなく映画を楽しめる北欧だからこそ、この数の上映が可能なのだが、その英語のスキルは映画祭のスタッフとして働くボランティアしかり。主に北欧とヨーロッパから招かれるゲストの映画人や審査員の送り迎えから、上映会場のしきりなど映画祭を支えるボランティアは映画祭の要でもある。

映画祭のファイナンスの70%はチケットセールス。市長を始め、政官財が協力して開催される映画祭は、この30年の間に、この時期に映画を見る習慣と映画を見る目を市民に植え付けた。

「映画祭の波及効果」

さらに、映画祭にかかわっていない映画館（ハリウッド作品を上映している映画館）にも好影響を与え、2月中頃のスポーツ休暇直前の冬のお楽しみとなっている。今年からは開催場をカバーする6番のトラム（路面電車）が11日間の期間中、40クローナ（約680円）のカードを買えば乗り放題など、年々市民のためのサービス努力をしている点も見逃せない。

地元の大企業ボルボは14台の新車を毎年、映画祭使用にペイントして貸し出している。終了後は自社で使用するという。

いかに手作りでアットホームかといえば、映画上映前のボランティアの挨拶もその1つ。「第31回イエテボリ映画祭へようこそ」。時にはゲストも登場する。観客は映画が始まる前と終了後、拍手を欠かさない。昼間の上映でも学生や年配者でどの会場も7割は埋まっているのも驚きだ。

毎年、この映画祭に行くたびに、日本の地方都市で開催される映画祭が学べるところの多さを知る。冬のこの時期は航空運賃も手頃なので、時間があればぜひ一度たずねて、イエテボリ市民と一緒に映画を楽しんでほしい。最近は温暖化で雪もない。この時期だけのお菓子、セムラを食べたり、最後のバーゲンシーズンを楽しんだりもできる。

「北欧映画の新しい流れ」

今年の同映画祭で見た作品を中心に、北欧映画の最新の傾向を紹介する。

最近の北欧映画はデンマークを筆頭にヨーロッパでは有力な供給国になっている。日本でも公開された「幸せな孤独」「ブラザーズ」「アフター・ウェデング」のスサンネ・ビア監督、「幸せになるためのイタリア語講座」のローネ・シェルフィグ監督を筆頭にデンマークの女性パワーは今も健在。ビア監督のハリウッド進出第1弾「悲しみが乾くまで」」（ベネチオ・デルトロとハル・ベリーの主演）は、米国ではコケたものの、北欧では評判もよく日本でも公開された。

アフリカ系デンマーク人のヘラ・ヨーフ監督が手掛けたあいち国際女性映画祭や昨年のEUフィルム・デイズで上映された「Oh happy day」もハリウッドでのリメイクが予定され、彼女自身も次々作品を制作している。今年、あいち国際女性映画祭で上映予定の「Fighter」は北欧初のワイヤーアクションを取り入れた、ナターシャ・アーティ監督の力作。

昨年の東京国際映画祭で上映された、ラース・フォン・トリアー監督の映画学校時代のエピソードを描いた「De UngeAr/the first years」（ヤコブ・トゥーセン監督）、「Just another love story」がアメリカでリメイクが決まったオーレ・ボーネダール監督も注目株。自ら主演した「Ma Salma Jamil/go with peace Jmail」のオマール・シャルガミ監督は、デ

ンマーク人の母とパレスチナ人の父を持つ34歳だ。

「バンパイア映画ブームの背景」

スウェーデン映画界では今、バンパイア映画がちょっとしたブーム。昨年夏にはその1つ「フロストバイト」(アンデッシュ・バンケ監督)が日本でも公開された。今年後半に公開予定の「Vanpyre/Vampires」のペッテル・ポンチキス監督曰く、「北欧の冬は夜が長くて暗いから、バンパイアが住みやすいかと思って」。「Lat den ratte komma in/Let the right one in」(トーマス・アルフレッドソン監督)はバンパイア映画に新たな一面を築いたと評判も高かった。

世界の映画祭で評判を得た「ぼくとママとおまわりさん」のエラ・ラムハーゲン監督の新作はゲイのカップルが養子を貰うコメディ「Patrik 1,5」、「ショウ・ミー・ラヴ」「エヴァとステファンと愉快な仲間」が日本でも公開された新鋭ルーカス・ムーディソン監督は、人気俳優ガエル・ガルシア・ベルナールを起用した新作「MAMMUT」を秋に公開する。ハリウッドで活躍するペッテ・ストーマレが主演した「Varg/Wolf」、コリン・ナトレー監督は、ヒット作「Angla gard/House ofAngel」の姉妹作のような新作「Angel」を発表した。

「ノルウェー、フィンランド、アイスランドの注目映画」

デンマークやスウェーデンに遅れをとっていたノルウェーも年々力を付けてきた。
今年は自国の"特技"や"特殊性"を活かした秀作があった。ストーマレが助演したスケボー青春映画「Switch」(オーレ・マッティン・ハフスモー監督)、日本でも原作の小説が翻訳された「Ulvenatten/Night of the wolf」(シェル・スンスヴァール監督)は、チェチェン人にテレビ局がのっとられるという衝撃的なサスペンス。どちらも国際水準の面白い作品だった。

アキ・カウリスマキ以外の作品がほとんど紹介されないフィンランドだが、今年は「Soolkoilua/playing solo」(ラウリ・ヌークセ監督)、「Kolmistaan/three in love」(ペッテル・リンドホルム監督)など女性が主人公のおしゃれな作品があった。

アイスランドからは衝撃的なドキュメント「Syndir Fedranna/At the end of the world」(アリ・アレクサンデル・エリギス・マグヌッソン＆ベルグステイン・ビョルグルフソオン監督)は1952年から74年まで政府の機関だった少年院で少年たちが虐待されていた実態を綴ったもの。60年代に問題を抱えた青少年を保護する施設で働いていたピッピーの若者たちと子供たちを描いた「Vedramot/The quiet strom」(グドニー・ハルドスドッテル監督)と合わせて、アイスランドの闇の部分を見せてくれた。

毎年、北欧らしい小作品から、ニルス・ガウプ監督の歴史大作「the Kautokeino rebellion」まで、多くの作品が製作されているのに、日本で公開が少ないのは残念だが、スウェーデンの奇才ロイ・アンデション監督の69年製作のデビュー作「Swedish love story」と新作「愛おしき隣人」が恵比寿ガーデンプレイスで同時公開されたのが最近唯一の一般公開だ。

※文章中の表記で、日本語の映画タイトルは公開済み、北欧語/英語のタイトルは未公開

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

インタビュー
東海大学文学部　山下泰文教授に聞く
ヴィルヘルム・ムーベリ作品「この世のときを」について

まえがき
初めてヴィルヘルム・ムーベリの本が日本で翻訳出版されました。「Din stund på jorden ＝この世のときを」（北星堂出版）です。ムーベリはスウェーデンの国民的作家として知られています。代表作は「移民4部作」です。スウェーデンが貧しかった時代、大量の移民を米国に送り、その歴史を4部の移民シリーズにまとめ、ベストセラーになりました。しかし、翻訳にあたった山下教授は移民シリーズでなく、自伝的な小説といわれる本を選ばれました。その意図、ムーベリの評価、ご自身のこと、翻訳の問題などについて、お話をうかがいました。

――ムーベリの経歴から紹介してください。
ムーベリは、貧しい家の出で、最終学歴は国民高等学校。それもほんの1年です。理由はこうです。彼はこの頃、アメリカに移民しようと思っていたのですが、母親から猛烈に反対されました。反対され、留まるように説得された時の母親の殺し文句は「学校に行かせてやる」でした。おじから（渡米の）チケットまで送ってもらっていたのですが、結局使わずに、スウェーデンに留まりました。それで、1年間国民高等学校に行かせてもらったわけです。その後、実用専門学校のようなところに行きましたが、学業途中で当時スペイン病といわれていた、一種の流行性肺炎のような病気にかかり、学校をやめざるを得なくなってしまいました。こういったわけでムーベリはまともな高等教育を受けずに実社会に出たのです。
ところが、ムーベリは幼いときからものを書くのが大好きな少年でした。母親が村の小さな雑貨屋などで買い物をした際に、品物が包まれていた新聞紙やわら半紙のような包装紙を持ち帰ってきましたが、ムーベリはその包装紙とか断絶用に壁に貼られていた紙に残り火の炭でものを書いていたそうです。で、子供の頃に『スヴェンの犬』という短編を書き、それで懸賞小説に応募したほどです。残念ながら賞は取れませんでしたがね。こんな具合にして物を書いていました。読めるものなら何でも手当たりしだいに読んでいました。特に歴史物が好きだったようです。それで実用専門学校を病気がもとで中退したあと、地方新聞社に勤めました。7年間ほど勤めました。それがいい勉強の場になったのです。取材して記事を書いたり、土地にまつわる話をまとめたり、ちょっとした短編（小説）を手掛けたりして、自社の新聞に載せていました。これがのちに作家となるムーベリにとってきわめて有益な、いわゆる作家修行となったのです。

――なぜ、山下先生はスウェーデン語を研究されるようになったのですか。
僕は姫路出身ですが、書写（ショシャ）山のふもとの片田舎の生まれで、子供のころは外人など見たこともありませんでした。しかし、中学校では英語が好きでした。でも、日本人教師に教わっている英語が果たして外国人に通じるんだろうか、一度でもいいから使ってみたいと思っていました。姫路市の高校に進学すると、町に外国人が一人いると聞きました。教会の牧師さんでした。実のところ、この牧師さんがどこの国の人かは知りませんでしたが。教会とはいっても、本当に小さな、粗末な一軒家にちょっとした塔が立っているような感じでした。僕がその牧師さんに会いたくて、その家の周りをうろついていると、外国人の奥さんが「何をしていますか」と片言の日本語で聞いてきました。「英語が喋りたいんです」。すると「じゃあ、バイブルクラスにいらっしゃい、週1回やっていますから」と誘われたのです。バイブルクラスに行くと、背の高い白髪の、僕らが外国人を描くと、こう描くだろうと思われるような、いかにも外国人の顔をした人が出てきました。そこの牧師さんです。で、その牧師さんの英語を聞いて、ああ、これが英語だと感激していました。ところがあるときです。部屋の隅に雑誌があって、表紙に書かれていた単語にAの上にマルがついている字（Å）があるのです。ん？と思いましてね。先輩に聞いたんです、これは何ということばの、何なのですかと。そうしたら、ここの牧師さんはスウェーデン人で、これはスウェーデン語なんだと知らされたんです。ショックでしたよ。本場の英語を喋っているとばかり思い込んでいましたが、実はこの人はわれわれを聖書の世界に引き込むために、彼にとってもや

はり外国語の英語を使って、それを餌にして自分たちを釣り込んでいたのかと、思ったんです。で、しばらく行かなくなった。でもスウェーデン語ということばが頭のどこかにこびりついていたんでしょうね。それから間もなくして、あるとき町の書店で「スウェーデン語四週間」という本を見つけ、何度か立ち読みした揚句、その本を買ってしまいました。家で少し独学とは言えませんが、わからないままに少し読んでいるうちに、牧師さんに、ミスター・リネルという人だったのですけれども、リネルさんに読んでもらおう、発音してもらおうと思い立って、また教会に帰ったのです。「スウェーデン語に興味あるのか」と聞かれ、「それだったら、日本人と文通したい子がいるからやってみないか」と言われましてね。それがきっかけだったんです。それから文通を始めて、スウェーデンへの興味が湧き、いつかスウェーデン語を勉強したいと思うようになったのです。

――ムーベリの代表作は「移民4部作」です。なぜ、その代表作でなく、この本を訳されましたか。

67年、ストックホルム大学に留学して、スウェーデンの主だった作家の作品を乱読していましたが、そのようなときにムーベリのこの作品に出会いました。非常に強いインパクトを受けました。米国に移民した主人公がスウェーデンの貧しい故郷に、兄と過ごした少年時代に思いをはせながら、北米移民となった自分の人生を振り返り、生きることの意味を尋ねている、人生を、人の生き様みたいなものを大変感傷的に描いているこの作品に打たれたのです。その描写がすごく気に入ったことと、もうひとつ、作品には僕の幼かったころの記憶とオーバーラップする部分が結構あって、大いに共感した、そう琴線に触れたわけです。何か郷愁のようなセンチメンタリズムを感じました。当時は若くて、別に自分の人生を振り返る必要などなかったのですが。でも、その当時、僕はスウェーデンに住んでいました。スウェーデンで1年も住めば移民になるわけですから、僕はある意味で移民だったわけですよ。たとえ留学に来ていたとはいえ。それに僕だって何かのきっかけで、例えばスウェーデン女性と結婚したりすると、そのままそこに居つく可能性だって十分あったわけです。言ってみれば、日本を捨てるわけですよね。そうなったら、自分の人生はどうなるのだったろうかと、複雑な気持ちが絡みました。

それに、こういう作品を論文で扱いたい、翻訳してみたいと、かねがね思っていました。そんなわけで、ずいぶん前に翻訳を試み、未熟な翻訳でしたが、四分の一ほどを翻訳していました。そのうち、スウェーデン語力も向上し、再読すると、今度はその文体の美しさに惚れ込みました。ムーベリのこの作品は、散文詩みたいな文で、韻を踏むわけではないのですが、非常に調子がいい。流れがいい。翻訳ではそれが忠実に活写できなかったかもしれませんが。でも知人のひとりが翻訳を読んで、原文は美しい詩の世界を描いているのか、と聞いてくれました。まさしくそういう印象を与える箇所が随所にある作品なのです。実に易しいことばや表現を用いながら、意味が深い、そう何かこう、われわれの感性に訴えてくるような文なのです。この作品は、いつかしっかりと翻訳しなきゃと、再読した時に思ったのです。

――ムーベリは、スウェーデンではどう評価されているのですか。

ムーベリは有名な作家です。はっきり言って、ムーベリを知らない人はスウェーデン人じゃないと言えるくらいに、ムーベリっていうのは国民に浸透した、大変有名な、いわば国民的大作家です。なぜかといいますと、理由は二つあります。

ひとつは、彼が農民を代表する、いわば虐げられた、権力に圧せられた人々の代弁者であったからです。彼は果敢に、スウェーデンでの社会の悪に対して、あるいは権力に対して論争を挑んだ人でした。僕は、ムーベリがテレビでウーロフ・パルメ（当時の首相）と激論したことを覚えています。ソルジェニーツィンがノーベル賞を受賞したときの話です。彼は当時のソ連から、相当に圧力をかけられていました。授賞式に出席するためにソ連の外に出たら、帰ってこさせないというような状況に置かれていた。そのときに、スウェーデンがなぜ抗議しないのか、ソルジェニーツィンの自由と人権を守ってやれないのか、ソ連の圧力に屈しているのかと、時のウーロフ・パルメ首相と激論を交わしたのです。また、あるときはスウェーデンの官僚汚職や高官のスキャンダル、そういったことを暴いた人でもありました。それで、彼は国民の間で大変人気があったのです。

それからもうひとつは、スウェーデン人の誰もが、アメリカに親戚が一人か二人はいると言われていますが、特に南スウェーデンの、彼の出身地スモーランドあたりでは、四人に一人が移民したと言われます。そして、移民すると、その大多数が移民したきりスウェーデンに戻らない。移民はいわばスウェーデンから消え失せることを意味していました。これはスウェーデンにとって、どんな大きな戦争によってよりもより大きな人的損害を被ったことになる、一大悲劇だ、とこうムーベリは述べています。ところが、その問題を真っ向から取り組んだ歴史書もなければ小説もない。だったら、この俺がこれを克明に調べてやろう、それがどういうものであったか、徹底的に調査して、彼は作家ですから、作品に書いてやろうじゃないかというわけです。それが「移民4部作」です。

ムーベリがこの移民の4部作で描いた主人公の移民は、彼と同じプロレタリアートです。貧しい農民で、豪農じゃありません。そういった小農（の主人公）が、凶作の上に、落雷でなけなしの種麦を失い、おまけに、ある意味で貧しさ故に子供でさえ一人亡くしてしまう。ほとほとスウェーデンに愛想をつかして故郷を後にする。この主人公のように経済的な理由から、また、宗教的な自由を求めて、その他色々な事情で多くの人々が群れをなしてスモーランドから北米に移民していったのです。彼らはムーベリ自身が属しているグループ、社会階層なんですね。彼らの多くはミネソタに行きました。理由は、そこがスウェーデンと土地も気候も似ているからです。そしてムーベリ自身も、作家となった後

で、そこへ移民しました。移民となって当時の事情を徹底的に調査したのです。そして、移民の物語を書くにあたり、カール・オスカルという主人公を創造したのです。彼は実在した人物ではありませんが、まるで実在したかのように、実にリアルに描かれた人物です。彼とその妻クリスティーナを主人公にしたこの小説は、移民に当時起こり得たと思われる事件やエピソードを織り交ぜながら、移民となった彼らの運命を、スウェーデンからアメリカへ、そしてアメリカに定住し、そこで死を迎えるまで、克明に追った、原文で実に約1800ページにも及ぶ4部作の大河小説です。そして小説は最終巻が『スウェーデンへの最後の手紙』といい、その巻末で、主人公、つまりカール・オスカルが移民先の北米で死んだことをスウェーデンにいる彼の親戚に伝える、まさしく「スウェーデンへの最後の手紙」でこの4部作は終わります。これはやはりスウェーデン人にとっては身につまされる話なんですね。自分たちの多くの親戚が移民していたからです。これは自分たちと直接かかわることで、自分たちにとってついこの間の出来事、ほん少し前の過去だったのですね。だから爆発的な人気を博したのです。そういうわけで、このムーベリは、スウェーデンでは誰もが知る作家になったわけです。

――「移民4部作」と『この世のときを』は、同じ移民を扱って、どこがちがうのでしょうか。

ムーベリは、移民4部作を書いた後、一種の虚脱感に襲われるのです。書けなくなってしまうのですね。ところがある日、死んだ兄のことがふっと頭に浮かんできて、何の構想もなく、ある一章を書き上げたんです。それがぱっと広がって、この作品が出来上がったのです。どうやら最初の一章ではなくて、おそらく兄が死ぬところの章ではないかと思います。

実は、彼の作品はその殆どが、例えば移民の四部作はその典型ですが、だいたい社会の中で、それも過去のある一時期に起きた事件やエピソードを扱っている。そしてそれを時間軸に沿って、いわゆる時系列順にリアルに描く。ところが、『この世のときを』は、そこで用いられる文体も様々で、しかもストーリーが込みいっている。単語の中には結構難解で、今では死語に近いような田舎ことばが出てくるし、それに、作品の組み立て方が従来のものとは違う。つまり小説の技法が、です。プロットが時系列に並べてないのです。ある意味で「意識の流れ」的な手法を用いているのです。いま現在見ているものが、過去を呼び起こす。さらに、ひとつの過去がまた別の過去を呼び起こす。そして、同じ過去でも時間の順序がめちゃくちゃです。ムーベリという作家は、元来「昔々あるところに」というような形でストーリーを展開するタイプの作家です。ところが、彼が活躍していた当時はエイヴィンド・ユンソンのように、イギリスのジェイムズ・ジョイスとかアメリカのウィリアム・フォークナーのようなタイプの作家が脚光を浴びていて、いわゆる新しい文学が当時流行していました。むちん、そのような潮流をムーベリが知らないわけではなかった。だから俺も、という意識があったと僕は思うのです。

それから、さらにもうひとつ、『この世のときを』は、きわめて多様な読み方ができる作品だと思うのです。主人公であるアルバート・カーションの回顧録というだけではないのです。例えば、俺は，そして俺の人生はこれでよかったか、俺は一体誰なのか、と自己を問い直すアイデンティティの問題を包含する作品ともとれます。俺は本当にアメリカ人なんだろうか、スウェーデン人なんだろうか、どっちつかずじゃないだろうか、俺という人間はどこへ行ってしまったのか。また一方で、彼の幼年期のスウェーデンで兄が若くして死んだ、いや殺された。兄は貧困によって殺された。若い元気な兄は"売られた"と小説では太文字で書かれていましたよね。何故死んだか、その謎解きの緊張感も我々に与えてくれる。ちょっとした推理小説的な面白みがあるわけです。また、兄のシーグフリドの平和主義を通してパシフィストとしての作家の心情を吐露しているイデー小説としても読めます。そのほか一移民の運命を扱った史的小説、さらにはもちろんフィクションではありますが、作家を知る上で重要な自伝、つまり私的な告白小説ともとれるのです。実に様々な読み方ができます。だから面白いのです。

――告白小説とは、どういう部分にあるのでしょうか。

この作品は、きわめて自伝的な要素が強いです。それに作品には作家のその後を暗示するような場面も描かれています。作品の巻末で、主人公のアルバート・カーションが海岸を散歩しています。どんどん歩いて、もしかすると死にいくのではないかと思わせます。この人生はもういい、あの世に行って兄に会いたい、と思って。実はムーベリ自身が、このあと数冊書きましたが、1974年に水死するのです。ストックホルムからさほど遠くないノテリエのヴェデェーにある自宅近くの海で入水自殺したのです。この作品はムーベリの死を暗示していた可能性が十分あると思います。ムーベリは「書けなくなったとき、それは私の人生の終わりだ」と、あるところで書いている。「そのときは、水が私を到達しがたい世界へとつれていってくれるだろう」と予告している。水です、海ですね。水死を予言しているのです。海が到達しがたいところに私を連れ戻すと書いているのです。

また、同じ最後の場面で、浜辺にできた主人公の足跡が海水によって消されいくくだりがある。人間が作った足跡なんて時間とともに消滅するというわけです。潮は時間と同義です。英語でも「Time and tide wait for no man」と言いますからね。「歳月人を待たず」ですが、その満ちては引く潮が、つまり時間が、波打ち際の砂にできたカールソンの足跡を、人間によって作られた足跡を消し去ってゆく。作家はきわめて暗示的なことを巻末に書き記しているのです。所詮、彼は、そしてわれわれはこの世で様々なことに葛藤しながら、やがて老いて死ぬ定めにある。そしてその葛藤を刻む足跡も、生きた証もやがて時とともに跡形もなく消え失せてしまう、そんなことを暗示しているように思われるので

す。きわめて悲観的な読み方ですが、でも作家の思想を反映しているようで、僕は実に面白いと思いますね。

――日本や時代とのオーバーラップということも指摘していらっしゃいますね。
われわれ日本人にも移民の歴史がある。地方から都会に出てきた、これも一種の国内移民です。集団就職ですよね。自分の故郷を捨てて、都会という世界に身をおいて、あくせく働いて、やがて定年を迎える。そのときふっと気がつくと、帰るべき故郷はない。そこで、本当に俺は幸せだったのか、この人生は故郷を捨てるに値しただろうか、この一回限りの人生を俺は大切にしてきただろうかと問い返したい人はきっと大勢といると思うのです。
ごく最近まで貧しかったスウェーデンがこの作品の中にあります。作品はそれを忘れては駄目だ、と言っているような気がするのです。スウェーデンの原点を知らないかぎり、今日のスウェーデンを理解できるわけがない、ということでしょうね。

――出版には「ムーベリ協会」が援助したと聞きましたが。
スウェーデンに「ヴィルヘルム・ムーベリ協会」という文学協会がありまして、僕もその会員です。『この世のときを』の出版を引き受けていただける出版社がなかなか見つからず、少し困っていたときに、会長さんにそのあたりの話をしたところ、委員会にはかって、ムーベリの若手研究家などに与える助成金、むこうでは「スカラシップ」と言っていますが、これを一種の出版助成金の形でいただけるように委員会で決めてくださった。同時に、翻訳の功績に対して表彰したいとおっしゃられた。それで、昨年の8月23日、年次総会の会場で表彰式がありました。その際、アバのビョルン・ウルバエウスとベニー・アンダーションも彼らの『デューヴェモーラのクリスティーナ』というミュージカルの功績で表彰されました。彼らの場合は賞金ではなくて、名誉会員になるという形の表彰でしたがね。表彰式ではスピーチせざるを得なくなりました。会場は王立図書館の大講堂で、100人ほどの出席者がいましたが、ムーベリと日本について話しました。出版助成に関しては、これより前にスウェーデン・インスティテュトがバックアップするという話もありましたが、こちらは事前に出版社が決まっていることが条件でした。出版社はどこか、何部出すか、版権は解決できているか、そういったことがすべて決まっていないと翻訳助成金の申請ができませんでした。ところが、ムーベリ協会の方は、そのようなことはすべて問わずに、とにかく本が出版されれば助成金を出しましょう、という姿勢でした。

――これから手掛けたい翻訳にはどういうものがありますか。
僕が今、真剣に取り組んでいるのは『ヘルマンの歴史』という本で、スウェーデンの王や王妃たちにまつわる物語風の歴史書です。とても面白い本です。ムーベリのものでは、「移民」シリーズの中で一番面白い第一部、『海外移民』。それから、パール・ラーゲルクヴィストの『巫女』(既刊＝岩波文庫)につながる巡礼もの、これも訳してみたいと思っています。もちろん、気分転換に少し軽めの、はやりのものもいくつかやりたいなと考えていますが。

――翻訳では、どういう点に気をつけていますか。
一語一語、きちんと訳すことです。創作ノートなどを読むとわかることですが、純文学作家は、例えばラーゲルクヴィストのような作家はことばをすごく真剣に一語一語選びながら作品を書きあげています。そのことを無視し、意識もせずに、日本語として表現しやすいから、読みやすいからといってサッと訳してしまったら、例えばラーゲルクヴィストのような作家なら、もし日本語がわかれば、そんな訳本をきっとOKしないと思います。作家が紡いだことばは基本的にはすべて訳しきる、その文体は忠実に日本語に写す、というのが僕の主義です。例えば、「これは赤いペンです」は「このペンは赤いです」とは違うのです。もし原文が「これは赤いペンです」となっていたらそう書かざるを得ない。文中に使われている語や言い回しを使わない、あるいは別の表現にする、あるいは書かれていること、つまり内容をまとめた形で翻訳する人がなかにはいます。そのような翻訳者は意外と多いです。ときには、翻訳者でなく編集者が、読みやすさを最優先して、そのようなことをやってしまうこともある。でも、原文で用いられている単語や文は、たとえ訳して奇異で、日本語としてしっくりこないときでも、作家がその単語を使い、そのような文を書いているかぎり、それをまず尊重し、その語や表現に見合う訳語や訳文をなんとか考え出して、日本語として耐えられる文にしなければならない。しかし、原語を逐語訳したり、原文をそのまま工夫せずに日本語に置き換えたりすると、日本語として不自然でうまく流れない。だから意味もうまく伝わってこない。だから熟考に熟考を重ねて工夫する必要があるのです。翻訳とは原文と日本語の駆け引きの中で、そのはざまで悪戦苦闘する、たいへんに苦労を強いられる、しんどい作業なんです。

――『この世のときを』では、どんな部分に苦労されましたか。
例えば作品の最後に、「私の足のあとの穴(＝足跡)を埋める」と書いてある。最後に主人公が砂浜を歩く場面です。海水が砂か何かと一緒に浜にできた足跡の中に入ってきて、そのへこんだ足跡を埋めてゆく情景です。おそらく普通の人なら「足跡を消す」でいいじゃないかと言うでしょう。でも、原文に「消す」とは書かれていてない。「消す」という単語は他にある。ところがムーベリはfylla「満たす・埋める」という単語を用いている。つまり、へこんだ足形に水が入り、そのへこみを平らにする、と書いているのです。だから「埋める」なんですね。そういう風に解釈するから、僕には「消

す」が使えなかった。スウェーデン語のfyllaに当たる日本語の「満たす」、「埋める」がこの文脈で極端におかしくなければ、それで日本語が流れるのなら、それを使う。日本語としておかしくない限界ぎりぎりまで原文を大切にするわけです。それが僕の流儀です。翻訳作業に言語から入っていない人はそういうことを大胆に無視し、あっさり他の表現に言い換えて訳せるかもしれませんが、僕らは言語から入っていますから、元のことばをできるだけ尊重し、大切にするのです。

（構成・協力　林　壮一郎）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年12月31日発行 ・・・ 所報No.345

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。
応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1　応募資格
特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受付けません。

2　内容と字数
北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字（程度）、1，600字（程度）、3，200字（程度）のいずれかの文長でお願いします。
（まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい）

3　掲載の可否と掲載時期
掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。
送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4　謝礼
ご投稿には薄謝を進呈いたします。

5　原稿の送付先
原稿は、「JISS事務局　所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese